

# 2008年 NPO-HIS島根(出雲・石見地方)調査報告書

## 調査概要

■調査日:平成20年11月7日(金)～9日(日)

■調査参加者: 原田理事長以下計7名

■調査スケジュール:

11月7日(金) 8:45羽田発 JAL1683便 10:00岡山空港着 10:30レンタカーで出発  
①足立美術館 ～ ②「チーナカ豆」～ ③玉造温泉 (玉造温泉「長楽園」泊)

11月8日(土)  
④松江市内 島根県立美術館 ～ ⑤出雲大社 ～ ⑥石見銀山  
⑦温泉津温泉街 ～ ⑧薬師湯(入浴)  
⑨宅野(カフェロマン・為山塾)交流会 (為山塾泊)

11月9日(日)  
⑩仁摩サンドミュージアム ～ ⑪琴ヶ浜海岸  
⑫銀の積出港「鞆の浦」(鞆の銀蔵・ともものかなぐら)にて昼食  
⑬やきものの里 ～ ⑭温泉津の銀の積出港「沖泊」  
17:50 広島空港発 JAL1616便 19:05羽田空港着 解散



## 11月7日(金)「チーナカ豆」訪問調査



「チーナカ豆」のアプローチ



庭から見た手作りの建物(広いテラスがある)

「チーナカ豆」は松江市街から車で20分の八雲町の集落のはずれの小高い林の中にありました。訪問すると、染色家の主の和山さんと可愛いシェフの律子さん、それに、満1歳の元気なユージン君が迎えてくれました。建物は自然のど真ん中にあり、手作りの山小屋風で、普通のレストランとはひと味もふた味も違う雰囲気。環境はとても風情があり、隠れ家的な(知る人ぞ知る通の店)とても魅力的たたずまいでした。早速、我々は居間に上がり、部屋のあちこちを珍しそうに探検し、しばらくしてテーブルについて、「夢手紙コンテスト」のことなどを聞きながら、歓談しました。部屋の中央にはストーブがたかれ、奥様の手作りの美味しいケーキとチャイティやコーヒーをいただき、暖かいアットホームな雰囲気にひたりました。



「チーナカ豆」の主人和山さん(染色家)と奥様(律子さん)ユージン君(1歳2ヶ月)と我々訪問メンバーで美味しいケーキとお茶をいただきながらの歓談

### 「チーナカ豆」のブログに我々の訪問に関する記事が出ていました

7日のカフェには東京からのお客さんも有りました。女性2名、男性5名、「NPO-HIS」のメンバーの方々でした。日本語で言うと、長いですよー、特定非営利活動法人ハイブリッド・インフラシステム推進機構、というのです。理事長はじめ皆さんが、そうそうたる肩書きの方々だったのですが、気さくにお話ができ、実はホッとしたんです。何をされているかという、都市と田舎の交流をテーマにしたようなNPOとのこと。 「夢手紙コンテスト」にも興味を持って頂いていて、今回、その現場に乗り込んでいらしたということです。しかも、嬉しいことに、「NPO-HIS」のHPにブログ『チーナカ豆』な日々をリンクして頂いているんですよ。ありがとうございます。

## 11月8日(土)石見銀山の街並み調査

石見銀山の町「大森」の街並みは、昔は代官所から南へ約1kmにわたって続き、銀山経営の中枢として、また石見銀山御料約4万8千石の政治・経済の中心として大きく栄えていました。街道沿いには代官所へ出仕した地役人宅や商いで賑わった町屋、公事宿をつとめた郷宿などが軒を並べて残されています。一般的に武家住宅は街道に面して門・土塀・庭などを設け、建物は敷地奥に建てられており、町屋は街道に面して軒を並べて建てられています。建築様式は武家住宅と町屋では大きな違いがありますが、身分や職種による町割りがなされず武家住宅と町屋が混在しており、変化に富んだ景観が特徴です。かつてたくさんの人で賑わった町並みは、周囲の自然に包み込まれるようにひっそりと残されています。現在、石見銀山で一般的な観光客が集中する場所は大森地区と龍源寺間歩です。大森地区は寺社や町並みを見ることができますが、他の観光地と違い、江戸期以降明治初期の鉱山開発放棄後は決して裕福な町ではなかったためにその時代の住居等が残っていると考えてください。この地区は世界遺産登録騒ぎが起きるまでは過疎の町だったわけですから。



石見銀山の街「大森」の中心部



石見銀山の街「大森」の中心部



観世音寺にて

観世音寺(かんぜおんじ)

「石城」と呼ばれる地名が表すように、岩盤を刻んだ石段を登ると、そこには仁王像がカッと眼を見開き、傍らには十六羅漢が静かに建ち並んでいます。かつては代官が、年始の祈願に参詣したといわれています。背後に見えるのは大森の街並みです。

## 11月8日(土)宅野(たくの)「為山塾(いさんじゆく)」交流会開催

今回の石見地区訪問のメインイベントとして、宅野の西尾さんの「為山塾」で交流会を実施しました。地元の人たちと我々が「為山塾」の広い土間に集まり、「カマドご飯」と地元の魚や野菜のバーベキューを囲みながら交流会が始まりました。交流会は、出席メンバーの自己紹介から始まり、話題提供として原田理事長を含む2名によりプロジェクターを使用してプレゼンテーションを行いました。その後、フリーディスカッションの中で質疑応答や町の活性化、アートによる都会と田舎の交流などに関する意見交換がなされました。主な意見は下記のようなものです。

- 1) 原田理事長からは、都会の学生やアーティストが滞在してアート作品を創るなど、アートによる活性化ができないかとの提案をし、これを第一歩として継続的に交流して行きたい旨の提案があった。
- 2) 国土交通省の中国地方での地域づくりの事例などをもとに、特に中山間地域での地域づくりで課題となりそうな事項が紹介されたが、実際に自分の仕事をしながら地域づくりに関わっている現地参加者から、空き農地の活用に向けた考え方などについて、意見を交換した。
- 3) 宅野で醤油の製造販売を営む戸藤間さんから、田舎は少子化と高齢化が進み、後継者ができず、国が推進している若者の働く場を作るような施策がなかなか上手く行かない旨の現況が語られた。
- 4) 浄光寺の龍澤さんから、大田市に寄贈される予定の古民家があるが市役所には知恵がないので、その活用方法として何か良い知恵がないか検討して欲しいとの要望があった。
- 5) 浄光寺の龍澤さんから、「仁万駅」の名称を「石見銀山駅」にしたいが、そのためには地元が6000万円の費用を負担する必要がある、何か良い方法がないか検討して欲しいとの意見があった。
- 6) 牧場経営の福田さんからは、ゆず栽培や空き農地での牛を放牧など自分の取組について紹介があり、地域としても現状の”守り”の経営から”攻め”に転じられるよう頑張りたいとの意向が語られた。
- 7) 鉄のオブジェを作製している篠原メタル工房の原田さんからは、若い人を受け入れてくれる篠原メタルの社長に会い、好きなことをやらせてもらっている、アートを通して頑張っているとの現状が熱く語られた。
- 8) 鉄のオブジェ作製「クラフトキャリア」の石川哲さんからは、原田理事長の話に出てきた「さとうりさ」と昔一緒に仕事をすることがあり、その話を懐かしく語り、現在の自分の仕事について語られた。

地元の若者たちは、交流会が終わった後も為山塾に隣接する「カフェロマン」で我々に熱く語りかけてきて、その目がキラキラと輝いていて、西尾さんが宅野で実行している活動が少しずつ根付いてきていることを感じました。



為山塾



原田理事長のプレゼンテーション



この方が西尾さん



「為山塾」の交流会の参加者



メタルアーティスト  
石川哲さんと作品

## 宅野交流会・宅野街並み調査



交流会の後、若者達とカフェロマンでの歓談



カフェロマンでの朝食



9日の朝市のおばちゃん達と一緒に記念撮影  
中心の若い女性は美味しいカレーの開きを売っている朝市の看板娘「勝部商店」の勝部悦子さん



藤間さんの醤油製造所の土壁の建物



宅野の街並みを調査

## 仁摩(にま)サンドミュージアム視察と鳴き砂の「琴ヶ浜」調査

砂の博物館「仁摩サンドミュージアム」は石見銀山からまっすぐ海に出たところにあります。設計は地元出身の建築家高松伸氏で、外観のピラミッド群は『エジプト・クフ王のピラミッドの墓室の中にあったといわれる鳴き砂と、仁摩町の「琴ヶ浜」の鳴き砂がよく似ている』ことをもとにしているそうです。大小6基の総ガラス張りのピラミッドは田舎の田園地帯に群立し、異彩を放ちます。昼は館内空間に陽光を導き、夜間はライトアップにより夜景を美しく彩り、幻想的です。世界最大の1年砂時計「砂暦」が一際目立ちます。隣接の「ふれあい交流館」では、ボヘミアンガラスの展示販売や、ガラス工房の創作体験を行っています。



世界最大の1年砂時計「砂暦」



仁摩サンドミュージアムにて



カップルが良く似合う鳴き砂の琴ヶ浜  
映画「砂時計」の舞台

## 馬路(まじ)の銀の積出港「鞆ヶ浦(ともがうら)」調査と海の見える食堂調査

「馬路」は16世紀前半中ごろにかけて銀、銀鉱石を博多に積み出した港です。その銀の積出港「鞆ヶ浦」は船の係留用に自然の岩盤をくり抜いた「鼻ぐり岩」など中世港湾を彷彿させるものが残っています。繁栄していた頃の土地利用を引き継ぐ集落も残っています。石見銀山の銀は約10kmの山道を馬や人力でここまで運んだとされ、その山道の入り口まで登って往時に思いを馳せました。

砂浜の海岸沿いには築100年の古民家を仁摩町馬路地区から移築した食堂「鞆の銀蔵」とレンタルコテージがあり、海の見える食堂で名物「ぼべめし」の昼食をとりました。食堂の窓からは日本海を間近に見ることができました。食堂の主人から、「この食堂の裏には洞窟があり、昔はそこに余った銀が隠されていたといわれており、今も洞窟の入り口には蓋がされて健在である」と話を伺いました。



銀の積出港「鞆ヶ浦」



「鞆ヶ浦」から伝馬船で島巡りもできる



鞆ヶ浦に隣接した食堂「鞆の銀蔵」  
鞆ヶ浦の潮騒の音に包まれながら新鮮な海の幸を味わうことができる

## 温泉津(ゆのつ)温泉地区街並み調査

温泉津は16世紀後半には港町が形成され始めたといわれています。江戸時代には銀山奉行支配の幕府直轄領となり、17世紀初頭までは石見銀積み出しや銀山関連諸物の搬入港として繁栄し、銀山衰退後は北前船による廻船業の基地として、また、薬効の高い湯治場の温泉町としても栄えました。

町の地割りは、急傾斜の山肌を背景にした狭い谷筋に山裾を削ってわずかな土地を確保し、17世紀末から300年後の現在までほとんど変わっていません。港近くには廻船問屋の屋敷が残り、東側には中世以来の歴史を誇る泉源を中心に、木造3階建ての旅館など、大正から昭和初期の建築物が集まって温泉街を形成しています。港町と温泉町のふたつの性格をもつ歴史的景観が特徴です。



温泉津温泉の日帰り湯「薬師湯」の外観



「薬師湯」の歴史を感じる浴槽



「薬師湯」の3階テラスから見た温泉街  
手前は「薬師湯」の湯気が立ち上る排気塔



温泉津の櫛島の荒波

## 銀の積出港沖泊(おきどまり)調査

石見銀山から世界に銀を積み出していた港が温泉津にあります。それが沖泊です。中世末期(400年前位)は、そこから石見銀山の銀が世界へと積み出され、戦国時代は毛利の水軍基地として、また江戸時代の初期は石見銀山の物資の陸揚げ港、そして江戸中期から明治時代までは北前船の寄港地として栄えてきました。

沖泊は温泉津港の先でトンネルを抜けるとすぐです。海沿いの遊歩道を歩くとはなぐり岩などの江戸期の港湾施設を見ることができます。ここは毛利水軍の旧跡でもあり、古い港の雰囲気が残っています。



温泉津の銀の積み出し港沖泊にて



温泉津の「やきものの里」  
2つの巨大な登り窯や資料館、創作体験教室があり、陶芸体験もできる。大きな水瓶「はんど」が特産。